信州大学知の森基金を活用したグローバル人材育成のための短期学生海外派遣プログラム
実施状況および成果

プログラム名	**健康教育のグローバル人材養成プロジェクト ～信州から世界の子どもに健康を～**	
学部・研究科名	教育学部	
実施期間	2015年9月14日～9月26日	
研修先(国・都市・施設名)	ラオス(ビエンチャン、ルアンパバーン)	
参加学生数　：　5名		知の森基金からの支援者　：　5名
プログラム概要	本プログラムでは、開発途上国でのスタディーツアーの機会を提供することで、グローバルな視点で、健康問題を取り巻く文化や社会的背景を理解し、健康増進のための教育活動を行うことができる人材の育成を目指した。ツアーに参加した学生は、アジアの開発途上国であるラオスに渡航し、プログラム提案者が、ラオス教育省、ラオス国立大学教育学部及び地方の教員養成校との連携により行っている、「学校での健康診断活動」に関する教員研修の補助と首都部及び地村落部での健康診断活動を行った。具体的には、首都部では、1）大学の附属の小学校での健康診断を行い、地方では、2）教員研修の中で、現地の教員養成校の学生及び村落部の小、中学校の教員を対象に健康診断活動の重要性とその方法に関する教育を行った。また、3）研修を受講した村落部の小、中学校の教員が、研修受講後に自らの学校で行う健康診断活動に参加し、測定補助を行った。さらに、4）他大学から参加した学生との交流活動、学校見学及び現地の子供達との交流、寺院、博物館見学等を行った。	

実施状況・成果

1）首都部の小学校での健康診断活動
ラオス国立大学に附属する小学校を訪問し、約600名の子どもたちの身長と体重を測定する活動を行った。健康診断活動を通して、実際に子供の体に触れることで、日本とラオスの子供たちの成長状態の違いについて学ぶことができたという感想が得られた。

2）学校での健康診断活動の必要性と、方法などについての教材開発と教員研修
日本で事前に準備した教材を、現地の研究者の協力を得て、ラオスの文化や社会に合致するように修正し、現地の教員養成校の学生及び村落部の小、中学校の教員を対象に教育を行った。学生の英語での説明を、現地の研究者がラオス語に通訳し、授業を行った。ツアーに参加した学生からは、教員養成校の学生や現地の学校教員から出される質問に対して、学生が答えることを通して、改めて、子どもが健康診断を学校で受けることの重要性について考えるきっかけになったという感想が得られた。

3）村落部の小、中学校での健康診断活動
研修を受けた教員の学校で行われる健康診断活動の実施の補助を行った。この活動では、身長、体重測定に加えて、視力検査及び聴力検査も行った。首都部の子どもとの比較から、村落部の子どもたちとの成長状態、健康状態の違いなどを実感することができたといった感想が得られた。また、初めて健康診断を経験する教員や子供たちの戸惑いの様子から、日本で自分たちが当たり前に行っている健康診断をラオスで導入することの難しさを感じた、子ども達が健康診断に強い興味を持ったことが印象的であったなどの感想が得られた。

4）他大学の学生との交流、学校見学及び現地の子供達との交流、寺院、博物館見学等
今回、信州大学の学生の他に、他の2大学から合計4名の参加があった。また、学校見学では、現地の子ども達に日本の遊びを教えたり、片言のラオス語で現地の子ども達と交流する機会があり、どこにいっても子ども笑顔や可愛さには変わりがないと感じたという感想が得られた。

今回の活動を通して、言語の異なる人とのコミュニケーションの難しさを強く感じたという感想が多々見られた。食事や交通、そのほかの日常の生活の中で、衛生概念の違いや、文化の違いを強く感じ、視野を広げるきっかけとなったという感想が得られた。以上のことから、今回のラオスでのスタディーツアーが、学生にとって、自分の視野を広げ、日本と世界の子供たちの健康の問題に関心を持つきっかけとなったのではないかと考える。

学生の声①－教育学部　学生

私は、このスタディーツアーを通して「もっと知りたい」という気持ちと「もっと知ってほしい」という気持ちが大きくなりました。健康診断活動を行ったり、エコヘルス教育の活動に参加したりする中で、もっとラオスの現状や背景、発展などについてもっと多くのことを知り、学びたくなりました。反対に、実際に農村部で健康診断のレクチャーをすることで、日本人が当たり前のように行っていることがラオスの一部ではほとんど知られていないことを目の当たりにし、もっと健康診断を広めたい、知ってほしいと思いました。また、ラオスのスタッフとの日々のコミュニケーションは信頼関係や友情を育むための欠かせないものでした。その中で相手を知ることや自分を知ってもらえることの喜びを感じることもできました。今後、さらに渡航を重ねることで、今回の2週間では気づくことができなかったことにも気づけるかもしれません。初めてのラオススタディーツアーは、自分の視野を大きく広げ、価値観を変える貴重な経験となりました。

学生の声②－教育学部　学生

私は、将来、自分の経験を通して、子ども達の人生に役立てる教員になりたいと考えています。だから、その経験の一つとして、このスタディーツアーへの参加を決めました。私は、ラオスは勿論海外も初めてだったので、慣れない気候、食事、風景に戸惑いを隠せない場面もありましたが、それ以上に、現地の皆さんとの健康診断活動は、特に心に残っています。健康診断活動は、日本にはない独特の蒸し暑さに悩まされましたが、対象者の子ども達との触れ合いが心の支えになっていたように思います。たった2週間でしたが、感じたものは多く、特に言葉は通じなくても、相手を理解しようとする姿勢が会話を成立させるということが実感できました。今回の経験は、私の目指す教師像に近づくための第一歩となりました。今後は、更なる成長のために、もっと積極的に挑戦していきたいと思います。

現地の教員養成機関の学生に栄養教育をする学生

地方での教員研修参加者との集合写真